

令和 3 年 5 月 15 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13369

研究課題名（和文）高齢者インプロ実践ファシリテーターの熟達プロセスの解明と支援モデルの構築

研究課題名（英文）Clarifying proficiency processes of facilitators playing impro with the elderly and construction of support model for them

研究代表者

園部 友里恵（Sonobe, Yurie）

三重大学・教育学部・特任講師（教育担当）

研究者番号：80755934

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、高齢者インプロ実践を行うにあたり、高齢者自身が主体的にファシリテーション技術を高めていくためのプロセスモデルを構築することであった。国内外のインプロ理論・実践研究、ワークショップ・ファシリテーション研究等の文献レビュー、国内外のインプロ実践への参与観察調査、国内でのアクションリサーチを通じて、高齢者の特性を踏まえたファシリテーション技術の特徴、高齢者自身がファシリテーターとして熟達していくプロセスを解明し、その支援のあり方をモデルとして構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでのインプロ研究で対象とされてこなかった「高齢者」の視点からインプロ実践方法論を検討し、同研究の対象領域を拡張した点に本研究の学術的意義がある。また、若手演劇実践者のコントロールを離れ、高齢者自身が自らの表現を「当事者」の視点から検討し発信することは、新たな表現形態の創出につながり得る。本研究の成果がパフォーマンスという「実践」を通して外部に公開されている点に社会的意義がある。また、高齢劇団員たち自らがファシリテーション技術を身につけ、各人が既に関わりのある場（高齢者サロン、老人会等）で実践にかかわっていくことで、こうした技術を劇団外の多様な活動の場にも広げていくことができる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to construct a process model for the elderly to improve their facilitation skills when they play impro. This research consisted of 3 projects: 1) review theories and previous researches about improvisational theatre, workshops & facilitation, etc., 2) participant observation in the advanced impro practice in Japan and overseas, 3) action research on “Kururu Senior Impro” in Kashiwa, Chiba. This research clarified proficiency processes of facilitators playing impro with the elderly and suggested how to support them.

研究分野：高齢者演劇

キーワード：インプロ（即興演劇）、高齢者、ファシリテーター、演劇、アクションリサーチ、ワークショップ、パフォーマンス、高齢者演劇

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 超高齢社会における高齢者の演劇活動への関心の高まりとその課題

高齢化率 26.7% (2016 年、内閣府) という超高齢社会を迎えた日本では、平均寿命の延伸等を背景に、これまで福祉や保護の対象とされてきた高齢者が、自ら学び、活動する主体として捉えられつつある。そうしたなかで、近年、高齢者の演劇活動が注目を浴びている。高齢者演劇の課題は、指導者や演出家の役割を担える高齢者人材が不足していること、高齢者が担う場合も、その者だけにパフォーマンスの質や稽古の方針が任せられ、活動の継続や劇団の存続自体もその者にかかっているケースも多いこと、である。

このような課題は、演劇分野のみならず、高齢者の活動全般において指摘できる。日本では、高齢者の活動や学習に関する研究は、主に生涯学習論・社会教育学の領域で蓄積が見られ、自立した活動を行う主体としての高齢者像が提示されている。しかし、地域活動やサークル活動等、高齢者の主体的な活躍が期待される場においても、強いリーダーシップを有する一部の高齢者や比較的若年の者が主導権を握ることで、集団の固定化を招き、誰もが参加し自由に意見を言い合える協働的な場とならないという現状がある。高齢者が主体的・協働的に活動を継続していくには、リーダーシップをシェアし、多様な高齢者が集団の運営や進行に関われるようにすることが必要である。

(2) インプロ (即興演劇) への着目

インプロとは、台本も、事前の打ち合わせもないなかで、その場で起こったことに目を向けながら、他者とともに物語を生み出していく即興演劇のことである。1950 年代の英米で演劇の一形態として発展し、今日では世界各地の様々な教育・学習的場面での活動に活用されている。

本研究は、後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える高齢者等、多様な高齢者の参加を可能にする演劇活動としてインプロに着目する。その理由は、①演劇未経験者でも取り組みやすいゲーム形式で学ぶことができるため、②事前にセリフの暗記や演出通りの「正確な」動作は求められないためである。

インプロの先行研究の課題は、インプロ理論・実践方法論が、俳優を対象に構築されていることである。すなわち、老いに伴う身体的・認知的課題を抱える高齢者 (演劇初心者、演劇未経験者の場合も少なくない) がインプロに取り組む場合、そうした身体的・認知的特性を踏まえたインプロ理論・実践方法論の再検討が求められる。

(3) 着想に至った経緯及びこれまでの研究成果の内容

研究代表者は、2013 年、千葉県柏市豊四季台団地 (高齢化率 41.9%) で高齢者対象の生涯学習講座としてインプロ実践を開始した。そして、科研費・研究活動スタート支援「後期高齢者の包摂を目的とした高齢者インプロ実践プログラムの開発」(2015-16 年度) では、2015 年 7 月に同講座有志を中心に日本初の高齢者インプロ劇団「くるる即興劇団」(65~90 歳、34 名) を結成し、同劇団を対象としたアクションリサーチによるプログラム開発を行った。

そこで課題化されたのが、稽古の進行方針やパフォーマンスの質を高齢者自身が決められていないことであった。上記科研費の研究では、高齢者を「受講者→パフォーマー」、すなわちインプロ講座をただ受講するのではなく、自ら主体的に学びパフォーマンスを行う「パフォーマー」へと捉え直したアクションリサーチを試みた。その結果、後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える高齢者も含め、劇団に参加する全ての高齢者が「パフォーマー」として舞台に立つことができた。しかし、劇団の稽古や公演時には、研究代表者を中心とする若手演劇実践者がファシリテーターやディレクター (演出家) の役割を担っていたため、高齢劇団員だけでは活動を進められないプログラムになってしまっている。そしてそれは、若手演劇実践者の価値観に高齢者を当てはめることにつながってしまう。

こうした課題を解決するには、「受講者→パフォーマー」という高齢者の役割転換をさらに発展させ、「パフォーマー→ファシリテーター」、すなわち高齢者自身の主体的な演劇活動を促すために、稽古を進行するファシリテーション技術や、パフォーマンスをいかに「見せる」といったディレクション (演出) の役割を高齢者自身が担えるようにしていく必要がある。そうすることで、高齢者自身が自らの感性に基づいた主体的な作品創造活動を継続的に行っていくことが可能となる。また、そこに若手演劇実践者が関わる場合も、高齢者の持つ表現の可能性を制限することなく効果的に支援する立場として、高齢者と協働していくことができると言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高齢者インプロ実践を行うにあたり、高齢者自身が主体的にファシリテーション技術を高めていくためのプロセスモデルを構築することである。具体的に明らかにするのは以下の 3 点である。

- ・ インプロ実践を行う際に求められるファシリテーション技術の理論的・方法論的検討
- ・ 高齢者の身体的・認知的特性を踏まえたインプロファシリテーション技術の検討
- ・ 高齢者がファシリテーターとして熟達していくプロセスとその支援のあり方の検討

3. 研究の方法

本研究では、次の4つの方法により、高齢者の特性を踏まえたファシリテーション技術の特徴、高齢者自身がファシリテーターとして熟達していくプロセスを解明し、そのとき必要となる支援のあり方をモデルとして構築する。

(1) 文献レビュー

国内外のインプロ理論・方法論、インプロを用いた演劇実践研究を整理し、ワークショップ・ファシリテーション・リーダーシップ研究、生涯学習・高齢者学習論、介護福祉領域におけるグループワーク論等、関連領域の先行研究・実践を検討し、インプロ実践に求められるファシリテーション技術の理論・方法論の特徴を明らかにする。

(2) 海外インプロ実践の参与観察を通じたファシリテーション技術の検討

インプロ創始者の1人であるキース・ジョンストンによる国際的なワークショップ（英国・ロンドン）において参与観察調査を実施する。ジョンストンの方法論を体験的に検討することに加え、各国のインプロファシリテーターとの意見交流を通して、高齢者を対象としたインプロ実践に求められるファシリテーション技術の実践上の特徴を探る。

(3) 国内インプロ実践者のファシリテーション技術の検討

国内で活動する優れたインプロ劇団（高齢者ではない世代で構成）の実践者をゲストファシリテーターとして招聘し、高齢者インプロ劇団「くるる即興劇団」の高齢劇団員自らがそのファシリテーションを体験する取り組みを行う。そして、高齢者ではない世代のファシリテーションと比較することによって、高齢者インプロにおけるファシリテーションの特徴を探究する。

(4) 国内アクションリサーチ

(1)(2)(3)で得られた知見を参照し、千葉県柏市豊四季台団地を拠点とする高齢者インプロ集団「くるる即興劇団」でのアクションリサーチも並行して進めていく。同劇団において、月2回程度（1回あたり約90分間）のインプロワークショップ（稽古）、年2回程度の一般公開パフォーマンス（公演）を行い、これらの活動を複数台のビデオカメラによって多角度から劇団員の様子を記録するほか、劇団員への個別インタビュー調査を定期的実施する。以上を通して、高齢者がファシリテーターとして熟達していく過程を分析するためのデータを蓄積する。

4. 研究成果

(1) 主な成果

本研究では、高齢者の特性を踏まえたファシリテーション技術の特徴、高齢者自身がファシリテーターとして熟達していくプロセスを解明し、そのとき必要となる支援のあり方をモデルとして構築した。以下、本研究の主な成果として、①段階的なファシリテーション練習、②ファシリテーションの手がかりとしての「フォーマット」（上演形式）、③多様な高齢者を受容するファシリテーションのあり方の検討、の3点について詳述する。

① 段階的なファシリテーション練習

これまで研究代表者が担ってきた「ファシリテーター」の役割を高齢劇団員に手渡していくことを考えたときに考慮すべきは、ファシリテーターを任されることの負担の大きさであり、それをいかに軽減させていくかということであった。というのも、インプロにおけるファシリテーターに「マニュアル」はなく、ファシリテーター自身もまさにインプロ（即興）しながら、その場で演者間及び演者・観客間で起こっている「今」のやりとりを見ることに加え、この後いかなる提案をすれば物語が展開していくかという「少し先」も見ながら、指示を出していかなければならないためである。

本研究のアクションリサーチの結果、高齢劇団員がインプロ実践におけるファシリテーションを可能な限り負担なく実施し、ファシリテーションの技術を主体的に高めていけるようにするために、次のようなプロセスをたどることとなった。

(i) ウォーミングアップのファシリテーション

まず2017年度には、毎回のワークショップの冒頭10～15分間に行うウォーミングアップのファシリテーションを劇団員が担うことを提案し、繰り返し実施した。4月開始当初には、ウォーミングアップとしてできそうなアクティビティを思いついた劇団員が挙手をしてファシリテーターを担ってきたが、次第にファシリテーターを「くじ引き」で決めるように変更し、全ての劇団員がファシリテーターを担える機会をもてるようにしていった。

その結果、当初はハードルの高さを感じていた劇団員も、ウォーミングアップのファシリテーションならできると実感し、誰が「くじ引き」で当たったとしても実施可能な状態になった。また、当初は、これまでファシリテーターを担ってきた研究代表者と目を合わせたまま、研究代表者に説明するようにアクティビティの手順を紹介していた劇団員が、次第に他の劇団員たちに視線を向けながら説明するようになっていく変化も見られた。

(ii) 「フリーシーン」のファシリテーション

また、「フリーシーン」におけるファシリテーション（ディレクション（演出）とも呼ばれる）についても、段階的に練習を繰り返していった。フリーシーンとは、「ゲーム」のように決められたルールや手順がないなかで、即興で物語をつくっていくことを指す。劇団では、ルールや手順を理解できない劇団員がいることから、次第にゲームに代わりフリーシーンに取り組むようになっていった。しかし、「マニュアル」がないことから、フリーシーンのファシリテーションはゲームのそれに対して難易度が高い。

そこで、まず取り組んだのは、ファシリテーターの役割は研究代表者がそのまま担っておき、シーン（場面）の途中で止め、客席にいる劇団員に「この後どうなると思いますか」と尋ねるといったものであった。当然、即興で紡がれるシーンの展開には「答え」はない。ワークショップにおいては、客席にいる劇団員から、1つのシーンのその後の展開について、複数のアイデアを出してもらって練習を繰り返した。

その結果、劇団員たちは、客席にいると「見られるプレッシャー」から解放され、物語の展開のアイデアが思い浮かぶという「小さな成功体験」を積んでいくことができたほか、ファシリテーターが単独で「いい」物語の展開を思いつく必要はなく、演者や観客に委ねながらその役割を果たしていけばいいと実感することができた。

(iii) パフォーマンスのファシリテーション

さらに、外部から観客を招いて実施するパフォーマンス（公演）においても、劇団員たちがファシリテーター（ディレクター）の役割を負担なく段階的に取り組んでいけるような実践プロセスを検討した。まず、2017年夏公演では、当日の「司会」を劇団員が担当した。「司会」には、公演開始前の「前説」（インプロに関する説明や、観客から「お題」をもらうための観客のウォーミングアップ等）や、シーン（場面）の進行（シーンごとに演者を舞台に上げること、観客から「お題」を複数もらうこと、観客から出された「お題」から1つを選択すること、シーンの大まかな設定を決定すること、次のシーンまでのあいだをつなぐこと等）である。こうしたことについて、公演前の稽古の段階から、劇団員とともに実験を繰り返し、公演当日には「司会」をやりたい劇団員を募り、その劇団員が「司会」に挑戦した。

その結果、公演で「司会」をつとめた劇団員からは、「司会」には演者として舞台に立つときとは異なる「緊張感」があったと語られた。本研究の期間では、「司会」を担う劇団員は限定されてしまった。今後、多くの劇団員が公演でも「司会」（ファシリテーター）の役割を担えるようになることは課題として残されている。

② ファシリテーションの手がかりとしての「フォーマット」（上演形式）

上記① (iii) で詳述したように、劇団員たちは次第に公演（外部から観客を招いてのパフォーマンス）におけるファシリテーションに取り組んでいった。その際、劇団員がファシリテーターを容易に担えるようにするために導入したのが、「フォーマット」（上演形式）であった。インプロ実践においては、これまでも様々なフォーマットが開発されてきている。本研究では、米国のインプロ実践者リサ・ローランドらによって開発された「The Bechdel Test」を参照・アレンジし、「モノログからインプロ」というフォーマットを開発した。「モノログからインプロ」では、事前に主人公を2人決めておき、それぞれの主人公を軸とした物語を展開していく形で進められる。ファシリテーターを担う劇団員にとっては、物語の中心となる主人公が決まっていること、そのキャラクターはいかなる人物かを観客とともに丁寧に決めていくプロセスが、物語の展開させていくための効果的な手がかりとして機能していることが明らかとなった。

③ 多様な高齢者を受容するファシリテーションのあり方の検討

3点目は、様々な身体的・認知的特性を有する高齢者も参加可能な高齢者インプロ実践のファシリテーションのあり方について検討したことである。

脳梗塞後遺症をもちながら劇団に参加していた劇団員Aさんは、2017年、転倒して骨折したことにより車いす生活となり、稽古場に足を運ぶことが困難になった。Aさんの活動参加を可能にしたいと試みたのが、「出張稽古」という実践であった。「出張稽古」は、年に2回、Aさんの自宅リビングを「稽古場」として使用し、そこに劇団員有志が集いインプロのワークショップやパフォーマンスを行うというものである。2018年度より開始され、毎回、5名程度の劇団員の参加があった。

「出張稽古」実践からみえてきたのは、「自宅リビング」がもたらす、ファシリテーションの「やりやすさ」であった。その「やりやすさ」を生み出していたものには次の2つがあると考えられる。1つは、自宅にある「もの」である。例えば、金魚のいる水槽や家族写真等、Aさんの自宅リビングには様々なものが置かれていた。そうした通常の稽古場（会議室）にはない「もの」が参加者をインスパイアし、ファシリテーターはその「もの」を手がかりに物語の設定や展開を考えていくことができたのである。もう1つは、演者間および演者・観客間の距離（物理的距離、心理的距離）の近さである。「自宅リビング」という空間は、通常の稽古場（会議室）に比べ狭いため、小さな声でも伝わるという「安心感」を得ることができ、「見られるプレッシャー」が軽減される。このことは、ファシリテーターも、演者も同様である。演者の「見られるプレッシャー」の軽減は、そこで生み出される物語にも影響を与える。すなわち、演者の「見られるプレッシャー」が軽減されることで、通常の稽古ではあまりみられなかった「リスクなアイデア」

を多く表出することができ、また、そうした「リスクなアイデア」が物語の「変化」を容易にするのである。

(2) 本研究の意義

本研究は、これまで対象とされてこなかった「高齢者」の視点からインプロ理論・実践方法論を検討することで、その理論・実践方法論自体を問い直し、同研究の対象領域を拡張したことに学術的意義がある。また、高齢者インプロ実践の研究は、国外においても「新たなテーマ」として認識されておりその実践及び研究蓄積は発展途上にある。本研究はそうした意味においても世界的に先進的な研究として位置づけられるといえる。また、若手演劇実践者が高齢者のパフォーマンスをコントロールするのではなく、高齢者自身が自らの表現を「当事者」の視点から検討し発信することは、新たな表現形態の創出につながり得る。そして、そのことは、これまで受動的な「講義受講者」「観客」であった高齢者を「パフォーマー」として、さらに場を主体的に動かす「ファシリテーター」として捉え直し、高齢者像をより能動的なものへと変容させることに貢献するものである。

加えて、本研究が「実践」を基盤として遂行されてきたことにも社会的意義があるといえる。本研究の成果は、論文等のみならず、パフォーマンスという「実践」を通して外部に公開されている。また、本研究が取り組んできた「インプロのファシリテーション技術」は、インプロや演劇だけでなく他の領域における活動（例えば、地域で行われている様々なグループ活動等）を、身体的・認知的能力の高低を問わずより協働的に進めていくためにも援用可能なものである。高齢劇団員たち自らがファシリテーション技術を身につけ、各人が既に関わりのある場（高齢者サロン、老人会、老人ホーム等）で実践にかかわっていくことで、こうした技術を劇団外の多様な場にも広げていくことができる。

(3) 今後の展望

①「自主稽古」期間になされたことの省察と調査

本研究は、研究代表者の産休・育休取得に伴い、2019年8月から2020年3月まで中断された。毎月2回継続していた稽古を中断期間中にも実施するか否かを劇団員に尋ねたところ、「自主稽古」という形での継続の希望があった。そして、劇団員の協力により、実践自体は中断することなく継続され、記録も蓄積されてきた。今後の課題の1つは、この「自主稽古」期間に何が起こり、劇団員たちが何を考えたのか、そして、劇団員たちの関係性がいかに組み変わっていったのかを明らかにすることである。

②「新しい生活様式」をふまえた高齢者インプロ実践の実現に向けて

本研究は、新型コロナウイルスにも多大な影響を受けることとなった。「自主稽古」期間中の2020年3月、会場の公共施設が感染拡大防止のため利用不可となった。リモートワークやオンライン授業などが進められていくなかで、劇団員のほとんどがインターネット環境やスマートフォンを所有していないことから、実践のオンライン化は困難と判断した。そうしたなかで開発されたのが、ハガキを介してインプロの「お題」を出し、それに「回答」することで劇団員間をつないでいく実践であった。この「お題」の出題を劇団員から募ることで、ファシリテーターの役割を創出した。

2021年5月現在、新型コロナウイルスが猛威をふるい続けていることに変わりはない。「感染するとハイリスク」と謳われる「高齢者」と呼ばれる劇団員たちは、たとえ対面での実践活動が再開できる状況になったとしても、そこへ参加することに不安を覚えてしまうという声も聴かれた。今後、劇団員たちが安心してインプロ実践を続けていくために、ハガキを介した非対面型のインプロ実践も継続しながら、対面型の活動を再開したときに、安心して他者と関われるような高齢者インプロ実践パフォーマンス及びファシリテーションのあり方を検討していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 園部友里恵	4. 巻 8
2. 論文標題 なぜ高齢者はインプロを学び続けるのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 演劇教育研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 園部友里恵	4. 巻 53(2)
2. 論文標題 脳梗塞後遺症を有する高齢者をめぐる語りにおけるポジティブ・エイジングの意味：千葉県柏市「くるる即興劇団」を事例として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会教育学研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 園部友里恵
2. 発表標題 移動困難者の自宅での即興演劇実践が参加者のパフォーマンスに与える影響
3. 学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 園部友里恵
2. 発表標題 劇場としての「居住空間」：要介護者と在宅介護者を包摂する演劇のあり方
3. 学会等名 2018年度 日本演劇学会 研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 園部友里恵
2. 発表標題 高齢者インプロ実践におけるファシリテーターの熟達プロセス
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 園部友里恵
2. 発表標題 インプロ（即興演劇）実践における障害を有する他者の受容過程
3. 学会等名 日本教育学会第77回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yurie SONOBE
2. 発表標題 Spanning the Difference of Age: The Elderly and Reasons for Learning Improvisational Theatre from the Viewpoint of Youth
3. 学会等名 9th International Drama in Education Research Institute (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 園部友里恵・福田寛之
2. 発表標題 仮面を用いた高齢者の即興演劇にみる 老いた身体
3. 学会等名 日本演劇学会2017年度秋の研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 園部友里恵
2. 発表標題 高齢者インプロ実践のアクション・リサーチ
3. 学会等名 日本教育方法学会第53回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 園部友里恵
2. 発表標題 高齢者と非高齢者におけるインプロ（即興演劇）の意味づけの乖離：「ボケ防止」をめぐる
3. 学会等名 日本質的心理学会第14回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 園部友里恵
2. 発表標題 高齢者インプロ（即興演劇）実践にみる 老い への抵抗と受容
3. 学会等名 日本教育学会第76回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 園部 友里恵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 184
3. 書名 インプロがひらく 老い の創造性	

1. 著者名 牧野 篤（編著）、園部 友里恵、ほか25名著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 400
3. 書名 人生100年時代の多世代共生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------